

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の観点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
殺菌成分	イソプロピルメチルフェノール	フェノールを使用						頻度不明(過敏症)		・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用することより低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。] ・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)		効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) ・排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)	
塩化セチルピリジ	スプロールトローチ						0.1%未満(口腔、咽喉の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)					口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)		1回1錠を1日3~4回かまわずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽喉炎、扁桃炎、口内炎	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
グルコン酸ク ロルヘキシジ ン	医療用には 歯科用がなく、塩酸クロ ルヘキシジ ンのトロー チ・ダン・ト ローチを使 用	抗菌剤の中 でも広範囲の 微生物に作 用する部類に 属し、特にブ ドウ球菌など のグラム陽性 球菌には、低 濃度でも迅速 な殺作用を示 す。一方、大 腸菌などのグ ラム陰性菌に も比較的濃度 で作用するこ とが知られて いるが、グ ラム陽性菌に くらべ感受性 に幅がみられ る。 真菌類の多く にも感受性を しめすが、全 般的に細菌 類よりも抵抗 性がみられ る。				0.1~5%未満 (舌のしび れ、味覚異 常、口内炎、 黒舌症、胃部 不快感、胃部 膨満感、嘔 吐、下痢等)	頻度不明 (過敏症)		クロルヘキシジ ンに対して過敏症の 既往歴		口腔内で唾液に より徐々に溶か しながら用いる (噛み砕いたり、 飲み込んだりし ない)(トローチと しての注意)		通常、1回1錠(塩酸ク ロルヘキシジンとし て5mg)を1 日3~5回、2時間ごと に投与し、口中で徐 々に溶解させる。	口内炎、抜歯 創を含む口腔 創傷の感染予 防
殺菌成分	クレオソート	配合剤し かな かったため、 薬局方を用 いた	本薬の防腐、 殺菌作用は フェノールに 劣るが、毒性 並びに刺激 作用は弱い。 粘膜、創傷面 などに対し、 初め刺激する が、後に知覚 麻痺を起こす								大量使用で粘膜 の刺激、腐食、 更にめまい、昏 睡、けいれん			うか及び根管 の消毒、歯 槽炎の鎮痛・鎮 静。適法に 従ってうか及 び根管の処置 後、適量を滅 菌小綿球又は 綿繊維に浸潤 させてか内あ るいは根管内 に挿入し、仮 封する。
	チモール	保存剤とし てしかな かったため、 薬局方を用 いた	本薬は他の 有機物が共 存しなければ フェノールや クレゾールよ り殺菌力が強 い。健康な皮 膚、粘膜を腐 蝕せず、わず かに刺激によ り刺激を起こ す程度であ る。しかし、創 傷粘膜に対し てはかなりの 刺激性を有す る。内服して も著しく胃腸 を刺激するこ とがないから 内用剤として も用いられ る。			服用後、食道 や胃腔内に やけるような 感覚を引き 起こす。腸の ぜん動作用 を刺激して下 痢症状を起こ す。							局所の殺菌用 に液剤、軟膏 剤又は粉剤と して使用され ている。例えば、 チモール1%と サリチル酸3% を含むエタノ ール溶液、酸化 亜鉛やステア リン酸亜鉛を 含む1~2%の 軟膏、チモー ル2%、ホウ酸 35%を含むタル ク製剤などが 用いられる。そ の他本薬はう かがいすり、洗 浄料、歯みが き剤などに添 加して用いら れる。	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ヒノキチオール フェノール	配合剤のみ フェノール 歯科用ではない	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。				頻度不明(過敏症)	・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。]・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)	効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下疳疾患の結核性瘰癧(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)		
局所麻酔成分 アミノ安息香酸エチル	ブーソカイン・ゼリー	神経終末には効果はないが、神経末梢部において麻酔作用があり、粘膜および表皮剥離部局所の知覚を麻痺する作用がある。 本剤は塩化ベンゼトニウムを含有し、St.aureus FDA 209P, E.coliおよびP.aeruginosaに対し抗菌力を示した。		中枢神経(振戦、痙攣)	ショック	中枢神経(眼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心、嘔吐)	過敏症						本剤を適量取り、局所に塗布する。	歯科領域における表面麻酔。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン	ベルカミン注、表面麻酔類似と考へ使用	感覚・求心神経繊維のNa <sup>+</sup> チャンネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる		振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眠気、不安、興奮、露視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。						使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人3～40mgを使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、通常成人1～40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエピネフリンを添加したものを、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05～0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人男子10～20mg、女子3～7mg ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10～20mg ・局所鎮痛には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1～2mg	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム ノイボルミチン 抗アレルギー作用、角膜上皮再生促進作用を有する 歯痛・歯槽膿漏薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用					頻度不明(眼の刺激感)	頻度不明(過敏症)				点眼用のみ使用(点眼としての注意)		通常、1回2～3滴を1日5～6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。	アレルギー性結膜炎
	グリチルリチン酸 デルマクリン軟膏 歯科用でない軟膏	グリチルリチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルリチン酸の化学構造がハイドロコルチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。				5%以上又は頻度不明(過敏症)				眼科用として使用しない(軟膏としての注意)			通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎
組織修復成分	細ククロロフィリンナトリウム 内服の配合剤のみしかなかった													
止血成分	カルバゾクロム アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散10% カルバゾクロムがなかったためカルバゾクロムスルホンナトリウム製剤の添付文書を使用	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えずに出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1～5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者				カルバゾクロムスルホンナトリウムとして、通常成人1日30～90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血
内服歯槽膿漏薬														

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗炎症成分	塩化リゾチム	レフトーゼ錠	抗炎症作用 癒瘍形成・組織修復作用 膿粘液の分解と排出作用 出血抑制作用			ショック、アナフィラキシー様症状・SJS症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1~5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)	0.1%未満(口内炎等)、頻度不明(肝機能障害(AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい)		本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)					作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないため、漫然と投与しない。		慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、疼の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀咳喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチムとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチムとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、疼の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀咳喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合
組織修復成分	カルバソクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散10%	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないことなく出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1~5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者							カルバソクロムスルホン酸ナトリウムとして、通常成人1日30~90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進によると考えられる出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血
組織修復成分	カルバソクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散10%	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管抵抗値を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないことなく出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗値増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1~5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者							カルバソクロムスルホン酸ナトリウムとして、通常成人1日30~90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進によると考えられる出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜からの出血、眼底出血・腎出血・子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	症状の悪化 につながるお それ	使用法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
		併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
ビタミンC(ア スコルビン 酸) 成分	アスコルビン 酸「ヨシダ」	アスコルビン 酸(ビタミン C)が欠乏す ると、壊血病 や小児ではメ ルセル・パ ロー病を生 じ、一般に出 血傾向の増 大、骨・歯牙 の発育遅延、 抗体産生能 や創傷治癒 能の低下など を起す。コ ラーゲン生成 への関与、毛 細血管抵抗 性の増強や 血液凝固時 間の短縮など による出血傾 向の改善、副 腎皮質機能 への関与(ス トレス反応の 防止)、メラニ ン色素生成 の抑制などが 報告されてい る。				頻度不明(悪 心・嘔吐・下 痢等)				下記疾患の うち、ビタミン Cの欠乏又は 代謝障害 が関与すると 推定される場 合(毛細管出 血(鼻出血、 歯肉出血、血 尿など)、薬 物中毒、副腎 皮質機能障害 、骨折時の 骨基質形成・ 骨癒合促進、 肝斑・雀卵 斑・炎症後の 色素沈着、光 線過敏性皮 膚炎)には効 果がないの に月余にわ たって漫然 と使用すべ きでない。	通常成人1日50～2,000m gを1～数回に分けて経口 投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。高齢者で減 量。	1. ビタミンC欠 乏症の予防お よび治療(壊血 病、メルセル・ パロー病)、ビ タミンCの需要 が増大し、食 事からの摂取 が不十分な際 の補給(消耗 性疾患、妊産 婦、授乳婦、は げしい肉体的 労働時など)。 2. 下記疾患の うち、ビタミン Cの欠乏又は代 謝障害が関与 すると推定さ れる場合。 毛細管出血 (鼻出血、歯肉 出血、血尿な ど)、薬物中 毒、副腎皮質 機能障害、骨 折時の骨基質 形成・骨癒合 促進、肝斑・雀 卵斑・炎症後 の色素沈着、 光線過敏性皮 膚炎。 なお、2.の効 能・効果に対 して、効果が ないのに月余 にわたって漫 然と使用すべ きでない。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
フィットナジオ ン	カチーフン錠 (5mg錠) / カチーフン錠 (10mg錠) / カチーフン散 10mg/g	ビタミンKは 血液凝固機 能に関与し て、血液凝固 機能を正常に 維持する。	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意  クマリン系抗凝血薬(ワ ルファリン)(ワルファリンの作 用減弱)	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	類薬(メナジ オン)により、 高ビリルビン 血症(大量・ 長期投与) 頻度不明(悪 心、嘔吐、軟 便)	妊娠末期(大量投 与)	・大量・長期投与 で高ビリルビン 血症(類薬-メナジ オン) ・妊娠末期の婦 人には大量投与 を避けること。 (類薬-メナジ オンで、新生児等 に高ビリルビン 血症)	用法用量  フィットナジオンとして、通常 成人1日5~15mg、新生児 出血の予防には母体に対 し10mg、薬剤投与中にお こる低プロトロンビン血症、 胆道及び胃腸障害に伴う ビタミンKの吸収障害、肝 障害に伴う低プロトロンピ ン血症には20~50mgを分 割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	ビタミンK欠乏 症の予防及び 治療 各種薬剤(クマ リン系抗凝血 薬、サリチル 酸、抗生物質 等)投与中に おこる低プロ トロンビン血 症 胆道及び胃腸 障害に伴うビ タミンKの吸 収障害 新生児の低 プロトロンピ ン血症 肝障害に伴 う低プロト ロンピン血 症  ビタミンK欠 乏が推定され る出血
ビ タ ミ ン 成 分	酢酸トコフェ ロール	ビタミンE 剤、ユベラ錠	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。 抗酸化作用 を有し、過酸 化脂質の生 成を抑制す る。 内分泌系の 賦活作用を 有し、内分泌 の失調を正 す。	併用注意	0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)				未梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわ たって漫然と 使用すべき ではない。	錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 未梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、血栓性静 脈炎、糖尿病 性網膜症、凍 瘡、四肢冷感 症) 3. 過酸化脂質 の増加防止	



禁煙補助剤

製品群No. 77

ワークシートNo.47

リスクの程度 の詳備	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)		併用注意		薬理・毒性に基づくもの		特異体質・アレルギー等によるもの		薬理・毒性に基づくもの		特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
禁煙補助薬	ニコチン	ニコチネルTTS	タバコに含まれるニコチンを経皮的に吸収させ、禁煙時の離脱症状を軽減		アドレナリン遮断薬(アドレナリン遮断性の減弱)、アドレナリン作動薬(アドレナリン作動性の増強)、禁煙開始後(フェナセチン・カフェイン・テオフィリン・イミプラミン・ベンタジシン・フロセミド・プロプラノロールの作用の増強)			5%以上(一次刺激性の接触皮膚炎(バッチのため)、不眠)、0.1~5%未満(皮膚刺激・色素沈着(バッチのため)、頭痛、めまい、倦怠感、異夢、悪夢、集中困難、嘔気、嘔吐、腹痛、口内炎、下痢、食欲不振、ALT、LDH、γ-GTP、総ビリルビンの上昇)、0.1%未満(疲労、しびれ、眠気、易刺激性、胸焼け、AST上昇)				非喫煙者、妊婦・授乳婦、不安定狭心症・急性期の心筋梗塞・重篤な不整脈・経皮的冠動脈形成術直後・冠動脈バイパス術直後、脳血管障害、本剤成分過敏症既往歴	心筋梗塞・狭心症既往歴、狭心症で症状が安定している、高血圧、不整脈、脳血管障害、心不全、末梢血管障害、甲状腺機能亢進症、褐色細胞腫、糖尿病、消化性潰瘍、肝・腎機能障害、アトピー性皮膚炎・湿疹性皮膚炎(バッチとしての注意)、てんかん又は既往歴、神経筋接合部疾患又はその既往歴、高齢者、		禁煙の意志が強く、循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を持つ患者であって、禁煙の困難な喫煙者にしよすること。	過量投与で急性ニコチン中毒症状。禁煙指導を実施。本剤使用中は喫煙により循環器系等への影響が増強されるので、喫煙させない。	類聚の長期使用によりニコチン依存性が製剤に引き継がれ離脱が困難になる症例が報告。10週間を超えて投与しない。		ニコチネルTTS10(ニコチンとして17.5mg含有)、ニコチネルTTS20(ニコチンとして33mg含有)又はニコチネルTTS30(ニコチンとして52.5mg含有)を1日1回1枚、24時間貼付する。通常、最初の4週間はニコチネルTTS20を貼付し、最後の2週間はニコチネルTTS10を貼付する。なお、最初の4週間に減量の必要が生じた場合には、ニコチネルTTS20を貼付する。本剤は10週間を超えて継続投与しないこと。	循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、代謝性疾患等の基礎疾患を持ち、医師により禁煙が必要と診断された禁煙意志の強い喫煙者が、医師の指導の下に行う禁煙の補助